

共に学びに向かう集団づくりで 学力下位層の生徒を引き上げる

全日本中学校長会会長／東京都新宿区立西戸山中学校校長 新藤久典

学力下位層の生徒を伸ばすためには、特定の生徒群のみを対象とするのではなく、クラス・学年・学校全体の運営を見据えた取り組みが必要だ。

どのような学校経営が求められるのか、全日本中学校長会会長である新藤久典先生にお話を伺った。

補習プログラムさえあれば 学力は上がるのか？

新学習指導要領への移行期間にある今、学力下位層の生徒に対する支援をどのように行うかが、改めて大きな課題となっています。勤務校のある東京都新宿区では、2009年度から「放課後等学習支援事業」が始まりました。区立の全中学校に学習指導員を配置し、学習内容の習得が十分でない生徒を対象に、放課後などを活用して指導に当たるといってもいいです。

学習指導員は、主に大学生がボランティアで務めています。本校には週4日ほど来て、

1日1時間半から2時間、国語・数学・英語を付きっきりで指導してくれています。こうしたプログラムは、下位層の生徒の学力を何とか引き上げたいと考えている学校現場としては、大変に心強いものです。

ただし、「プログラムを導入すれば、生徒の学力は必ず上がる」とは考えていません。肝心の生徒自身がやる気にならなければ、うまく機能しないからです。

特に、下位層の生徒の大半は、「学ぶ意義」や「学ぶ喜び」を味わった経験がほとんどないまま、学校生活を送っています。いわば、学びに向かうための「器」が出来ていません。そうした生徒に、「放課後等学習支援という

プログラムが出来たから、放課後に学習指導員から勉強を教えてもらいなさい」と言ったところで、「じゃあ勉強してみようか」という気にはならないでしょう。普段の授業と同じように、ただの苦痛にしか感じないのではないでしょうか。

学力向上を目的としたさまざまな制度やプログラムを充実させることは確かに必要ですが、それらを効果的に行うためには、生徒自身が「もっと勉強が分かるようになりたい」という気持ちになることが大前提となります。それは、一斉授業はもちろんのこと、少人数授業や習熟度別授業、補習などを行う時と同じです。

「学力保障」のために、移行期間の今できること

第1回

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー



しんどう・ひさのり◎教職歴34年。担当教科は国語。東京都内の公立中学校教諭、東村山市教育委員会指導室長、東京都教育委員会管理主事などを経て、現職。2010年5月、全日本中学校長会会長に就任。モットーは、「Never say "can't". 一己を信じて、まず行動する人になろう」

「共に学びに向かう集団」が 下位層の生徒を引き上げる

下位層の生徒の意識を、どうすれば学びへと向かわせることが出来るのか。鍵を握るのは、私たち教師がクラスや学年、学校全体を「共に学びに向かう集団」につくり上げられるかどうかにあると、私は考えます。

学力上位層の生徒は、学ぶ喜びや達成感を何度も経験しています。また、小学校時代からクラスのリーダーとしての役割もよく求められてきたでしょうから、学校行事などを通

じて、「自分はこの集団に必要とされている」「みんなの役に立っている」といった自己肯定感も感じています。学ぶ喜びをもっと感じ取りたいから更に前向きに勉強に取り組みますし、自己肯定感をもっと高めたくて、リーダーとしてクラスや学年を引っ張っていきましょう。

クラスがうまくまとまっている時には、そうした上位層の存在は、下位層に対して良い影響をもたらします。下位層の生徒に「一緒に勉強しようよ」「合唱コンクールを一緒に頑張ろうよ」と働き掛け、全体を引き上げる

役割を果たしてくれるからです。中・下位層の生徒も、クラスがまとまっていれば「自分もみんなと一緒に頑張りたい」という気持ちが強くなり、それに応えようとしています。クラス全体が同じ方々を向き、「共に学びに向かう集団」が成立しているわけです。

ところが、クラスが一つにまとまらず、上位層と下位層の生徒の意識が分断されている状態では、下位層の生徒は上位層の生徒の呼び掛けに対して、聞く耳を持ちません。上位層が「一緒に勉強しようよ」と言っても、「どうして勉強をしなければならんだ」と反発するばかりです。上位層の生徒は、最初は何とかしてクラスをまとめようとはしますが、やがてあきらめて「自分だけ勉強すれば良い」という気持ちになっていきます。

勉強に意義を見いだせない下位層の生徒は、やがて授業中に騒ぎ出したり、教師に悪態をついたり、他の生徒に手を出したりするようになりがちです。そうした行為の中にしか、教室における自分の存在価値を見いだせないからです。そうになると、他の多くの生徒にとつて、下位層の生徒はじゃまな存在でしかありません。「クラスにあいつらさえないなければ、もつと落ち着いた状態で勉強に取り組めるのに……」と考えるようになり、最悪の場合、いわゆる学級崩壊の状態に陥ってしまいます。

これでは、下位層の生徒の意識が、自ら学

びへと向かうことは難しいでしょう。上位層の生徒にとっては、仲間を引っ張っていきながら自己肯定感を高め、リーダーシップを磨く機会が奪われてしまいます。双方にとって不幸な事態になるのです。

「どのような学校にしたいのか」 生徒と教師にビジョンを伝え続ける

クラスや学年、学校を「共に学びに向かう集団」とするために、校長が果たすべき役割は非常に大きいと思います。

私が校長を務める中学校では、学校経営方針の一つに「学ぶ喜びを思う存分味わえる学校づくり」を掲げました。「成績にかかわらず、生徒全員が学ぶ喜びや意義を感じられるようにしよう」というビジョンを打ち出しています。これは、生徒に対するメッセージでもあると同時に、教師に対するメッセージでもあります。クラスが一つにまとまっていない時には、実は教師も「あの生徒さえいなければ、もっとクラス運営や学年運営がスムーズになるのに」と思ってしまうかねないのです。こうした状況を防ぐために、校長は「学校は運命共同体であり、誰かを排除するような形では共に学びに向かう集団はつくれない」というメッセージを、生徒や教師に対して粘り強く発信し続ける必要があります。私は、ジョン・F・ケネディの「国が君たちのために何をしてくれるかではなく、君たちが国の

ために何が出来るかを問おう」という有名な演説の一節を引用して、「学校が自分のために何をしてくれるかではなくて、自分がクラス、学年、学校のために何が出来るかを一緒に考えていこう」という話をよくします。

校長の最も重要な役割の一つは、「自分たちの学校をどのような学校にしたいのか」というビジョンを生徒や教師に語り続けることだと思っております。

「先生方に託す」姿勢が 校長には必要

次に校長に求められるのは、ビジョンを具現化できる学年主任を3学年共にそろえる・育てることだと思えます。教師一人ひとりの経験や考え方を見極めながら、誰を学年主任にするかを判断します。学年団の組み合わせも重要です。実力のある教師同士でも、相性が悪ければ互いに足を引っ張り合いかねません。うまく組み合わせられれば、相乗効果が期待できます。

学年主任と学年団を決めたら、後は先生方を信じて託すことです。「生徒のためにこのようなことがしたい」という提案があれば、まず受け止める。ビジョンとずれていなければ、「最後は自分が責任を持つから、思う通りにやってほしい」と言える校長でありたいものです。

先生方は、校長が信じて託せば伸び伸びと、

クラスや学年を「共に学びに向かう集団」に高めるために力を注ぐようになります。本校を例にとれば、10年春に卒業した学年は、入学時、下位層が厚く、大きな課題となっていました。四則計算が出来ない、漢字がほとんど書けないという生徒が少なからずいたのです。小学校で上位層だった子どもが多くが私立中学校などに進学したため、学習面でリーダーシップを発揮できる層が薄いというのも課題でした。

こうした状況を何とかしたいと、当時の学年主任が考えたのが「本物を体験させ、生徒の知的好奇心を揺さぶる教育」でした。

この学年団は驚くほど行動力があり、「日本の伝統的な楽器である三味線を教えたい」と思ったら、津軽三味線の間人国宝の方に直接連絡して、講師をお願いするほどでした。さすがに人間国宝の方は無理でしたが、その方のご紹介で、将来有望な若手演奏家に来校していただきました。生徒は、プロの演奏家が語る三味線についての話や生演奏を、身を乗り出すようにして聞いていました。そして、「自分も弾いてみたい」「もっと三味線について調べたい」と言っていました。学ぶ喜びを味わう経験が乏しい生徒でも、本物と出会った時には激しく心を動かされるものです。このようにして、生徒の知的好奇心を揺さぶるうとしたわけです。

学校行事では、「3年生で計画、準備、運

学力下位層を伸ばす3か年のストーリー

営のすべてを生徒自身が担えるようになること」を目標にしました。3年生でのゴールを見据え、そのプロセスを言語化することで、どのように指導していくかが見えてきます。実際、この学年では「教師主導」から「生徒主導」による行事運営へと少しずつ任せる役割を増やすことにより、リーダー層を育てつつ学習集団としての質を高めていきました。こうして、生徒は入学時とは見違えるような成長を遂げて、本校を巣立っていきました。

生徒一人ひとりの実態に対応してこそ真の対策となる

下位層の生徒を学びに向かわせるためには、私がかもう一つ大切なこととして挙げたいのは、教師が生徒一人ひとりに直接、語り掛けることです。

例えば、下位層向けのプログラムを行う時、参加させる生徒を事務的に決めてはいいないでしょうか。校長が職員会議で「区のプログラムで下位層対策をすることになりました。成績が〇〇以下の生徒は受講させるようにしてください」と話すと、担任が該当する生徒に「受講対象になったから参加しなさい」と告げる。これが一般的な段取りだと思えます。しかし、一方的に伝えるだけでは、生徒は「受けたい」という気持ちにはならないでしょう。「これは君のためのプログラムなんだよ」というメッセージを、説得力を持って伝えられ

るかどうかが、生徒が主体的に学習に取り組むための鍵となるのです。

「今、君は楽しい学校生活を送っているよね。でも、勉強についてはどうだろうか。今度、『放課後等学習支援』というプログラムが出来て、放課後、大学生のお兄さんやお姉さんが学校に来て、一対一で勉強を教えてくださいのだけど受けてみないか。きっと勉強が分かるようになるし、勉強が分かれば、学校生活はもっと楽しくなると思うよ」という具合にです。

下位層というと、「成績の低い2割の生徒たち」というように、生徒を「群」として捉えがちです。そして、プログラムも「群」として実施しようと思えます。

しかし、本来「下位層群への対策」ではな

学力下位層を伸ばすポイント

- ・ 学力下位層の生徒だけでなく、すべての生徒を見て、クラス・学年・学校全体を「学びに向かう集団」にする
- ・ 生徒の卒業時の姿を明確に描いて、その実現に向けた3年間の指導を考える
- ・ 生徒は「群」でなく「個」と捉えて対応してこそ効果がある

校長が果たす役割

- ・ 教師と生徒に学校が目指す姿を具体的に示し、浸透させる
- ・ 人事を決めた後は、現場の教師に任せる
- ・ 教師の提案は、ビジョンとずれていなければ、その熱意を受け止め実行させる

く、下位層に位置する「A君」であり「Bさん」という個々の生徒に対するプログラムであるはず。このプログラムはA君に合うはずだから、受けてもらいたい」とか、「Bさんにとって有意義なプログラムにするためにはどうすれば良いだろうか」というのが、起点であるべきです。「個に応じた指導」とは、こういうことなのではないでしょうか。

「共に学びに向かう集団」をつくり上げ、もっと勉強が分かるようになりたいという気持ちを育むこと。生徒一人ひとりを丁寧に見て、それぞれに合った支援をすることが、生徒を学力面でも精神面でも大きく成長させます。それはとても困難なことかもしれませんが、だからこそ校長は、その重要性を訴え続けなければならないと思います。